

直近のアメリカ英語史における *the problem is (that)* の分析 —構文の談話基盤性を中心に—*

柴 崎 礼士郎
明治大学

This study aims to explore the recent development of shell noun constructions with a focus on *the problem is (that)* in the history of American English. The construction has the strong tendency to appear in front of the speaker's statement, which facilitates the speaker-hearer interaction in immediate discourse; the construction anticipates upcoming talk. This discourse-syntactic pattern has come to show the speaker's stance towards the statement to follow, as evidenced by the emergence of the first person possessive construction *my problem is*.

キーワード： 貝殻名詞 (SN)、SN 構文、談話基盤性、発話開始位置、文法化

1. はじめに

本稿では、名詞 *problem* を含む慣用表現 *the problem is (that)* の談話機能を考察する。例えば、*Longman Dictionary of Contemporary English, fifth ed.* (以下 *LDOCE*) (2012) には以下の説明と用例が掲載されている。修飾語については別途考察する。

- (1) a. *the (only) problem is (that) ... spoken used before saying what the main difficulty in a situation is.*
- b. *The problem is, there isn't enough time.* (*LDOCE* 2012: 1382)

上掲例文から分かることは、*the problem is* は話者の見解を含む後節の直前に生起し、談話上の重要事項への(対話者の)注意喚起を促す機能を果たしている。また、*LDOCE* (2012) は *the problem is* が話しことば (*spoken*) での生起率が高いことも指摘しており、以下の学習用図書・辞書類からも類例を挙げることができる(鈴木・三木 2011 も参照)。

* 本稿の執筆に際して、3名の査読者および東泉裕子先生から貴重な御意見を頂きました。ここに御礼を申し上げます。本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)「英語史に見る主要部と依存部の競合関係について」(研究代表：柴崎礼士郎；課題番号：25370569)による補助を一部受けていることを明記しておく。

慣用表現を用いた教育・学習効果の高さが窺い知れる。

(2) a. the problem is (that) ... 「問題は ... だ」

b. The problem is that I have no idea where to start.

「問題はどこから手をつけてよいかわからないことだ」 (塚本 2012: 393)

(3) The problem is, we're running out of time.

「問題は私たちにもう時間がないということだ」 (井上・赤野 2003: 1576)

(4) the (only) problem is (that) ... 「(唯一の)問題は...だ」

(瀬戸・投野 2012: 1560)

談話のつながりに用いられる (*problem* を含む) 名詞群の研究も多数報告されている (e.g. 'general nouns' in Halliday and Hasan 1976; 'anaphoric nouns' in Francis 1994; 'carrier nouns' in Ivanič 1991; 'shell nouns' in Schmid 2000; 'numerative/catch-all nouns' in Hinkel 2001; 'signaling nouns' in Flowerdew and Forest 2014)。こうした先行研究の多くは Aktas and Cortes (2008: 4-5) に比較可能な形でまとめられており、例えば、*concept*, *fact*, *idea*, *issue*, *result*, *reason*, *problem* 等が共通する例として挙げられている。また、異なる用語で研究が進められてはいるものの、Ivanič (1991: 109) が指摘するように、こうした名詞群は可変 (variable) と不変 (constant) の意味を持ち、そのうち可変の意味は用いられるコンテキストに依存しているという共通の性質を備えている。(1b) の例を用いれば、*problem* の不変的意味は「問題」、可変的意味は「十分な時間がないこと」となる。

本稿では、Schmid (2000) によって提唱された 'shell nouns' という用語を用い、*the problem is (that)* 構文の談話機能を分析する。Schmid (2000: 4) によれば、shell nouns とは抽象名詞であり、複雑な命題内容とも言える情報単位に対して、程度の差こそあれ概念の外枠 ('conceptual shells') として使用可能なものと定義されている。上述の (1b) で言えば、*problem* が概念の外枠であり、「十分な時間がないこと」が貝殻の中身 ('shell content' in Schmid 2000: 7) に相当する (第 2.1 節を参照)。

用語として shell nouns を採用する理由は、該当する 670 もの名詞を分析した Schmid (2000) が非常に体系的である点に加え、Schmid (2000) の名詞リストに基づく名詞 (句) の分類研究も報告されており、理論言語学だけではなく応用言語学への影響も推し量ることができるからである (e.g. Gray 2010; Lin 2012)。以下、本稿を通じて shell nouns を「貝殻名詞」と試訳するが、'shell noun constructions' は冗長さを避けるために「SN 構文」と略記する。

上述した一連の抽象名詞 (句) 研究のうち本稿と直接関係するものには、Aijmer (2007) による *the fact is that* の研究 (大室 2005 も参照)、Imo (2010) および Günthner (2011) によるドイツ語の研究、Keizer (2014) によるオランダ語と英語の対照研究がある。先行

研究の多くが現代語研究であるのに対して、通時的側面にも焦点を当てたドイツ語研究として Otsuka (2014) があり、英語研究では Shibasaki (2014a, 2014c) および柴崎 (2014b) がある。特に関連性の深い Günthner (2011) では、ドイツ語の *die Sache ist/das Ding ist* (“the thing is”) 構文が後続する情報を予測する「投射句」(‘projector phrase’) として再分析されているとの報告がある。その証拠として後節の語順が「動詞第二位」の主節化を果たしている点は、オランダ語でも確認可能である (Keizer 2014)。尚、後続発話を予測する機能は Hopper and Thompson (2008) の wh 分裂文研究からの報告に基づいている (第3節以降を参照)。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では SN 構文の種類を提示し、更に *problem* に注目する理由と本研究の背景を説明する。第3節では *the problem is (that)* の談話機能を分析し、第4節では *the problem is (that)* が *my problem is (that)* 等の下位構文を派生している点を指摘する。第5節はまとめである。本稿では *The Corpus of Contemporary American English 1990-2012* (以下 COCA) および *The Santa Barbara Corpus of Spoken American English* (以下 SBCSAE) を中心的に用い、主に過去20年余りの現代アメリカ英語における *the problem is (that)* を分析する。必要に応じて他のコーパス使用もあるが、その都度明記する。尚、紙幅の都合により、本稿では当該構文の現在形 (i.e. *the problem is (that)*) の分析に限定することを付記しておく。

2. 研究の背景

2.1. SN 構文

Schmid (2000: 22) は貝殻名詞を用いた4形式の SN 構文を紹介している (表1)。表1は、Schmid (2000: 22) から抜粋した SN 構文の4形式を、Aktas and Cortes (2008: 5) に基づき各々の中心的談話機能である後方照応 (cataphoric) と前方照応 (anaphoric) の2機能に分類して加筆を施してある。

後方照応機能型および前方照応機能型には2形式の SN 構文が存在し、前者にはそれぞれ3形式の構文が存在する一方、後者には下位構文がない。表中の例文では、太字部分が貝殻名詞を表しており、下線部分は貝殻名詞の具体的内容を示す謂わば貝殻の中身 (shell content) を表している。前述のように、本稿では *problem* を伴う後方照応機能型の N-*be-that* 形式の現在形に注目し談話機能を分析する。

表1: SN構文の4形式 (Schmid 2000: 22; Aktas and Cortes 2008: 5)

Function	Pattern	Abbreviation	Example
Cataphoric	Shell noun (N) + postnominal clause Variants: <i>that</i> -clause, <i>to</i> infinitive-clause, <i>wh</i> -clause	N+cl N- <i>that</i> N- <i>to</i> N- <i>wh</i>	Mr. Bush said Iraq's leaders had to face the fact <u>that the rest of the world was against them.</u>
	Shell NP + <i>be</i> + complementing clause Variants: <i>that</i> -clause, <i>to</i> infinitive-clause, <i>wh</i> -clause	N- <i>be</i> -cl N- <i>be</i> - <i>that</i> N- <i>be</i> - <i>to</i> N- <i>be</i> - <i>wh</i>	The advantage is <u>that there is a huge audience that can hear other things you may have to say.</u>
Anaphoric	Referring item + (premod) + shell noun	<i>th</i> -N	(Mr. Ash was in the clearest possible terms labelling my clients as anti-semitic.) I hope it is unnecessary to say that this accusation is also completely unjustified.
	Referring item as subject + <i>be</i> + shell noun (phrase)	<i>th</i> - <i>be</i> -N	(I won the freshmen's cross-country. – Mm.) <u>That</u> was a great achievement wasn't it?

2.2. *the problem is (that)* の談話における使用頻度と分布——COCA の場合

表2は、COCAにおける *the + shell noun + is that* (N-*be*-*that*) 構文に生起する貝殻名詞のうち使用頻度順に上位10タイプをまとめている。Schmid (2000: 59) の用いたコーパス (Bank of English) では、*problem* (2672例)、*thing* (1532例)、*truth* (1235例)、*fact* (1218例) および *trouble* (1034例) が同構文中に特に高い頻度で生起している。一方、COCAを用いた場合にも同様の結果が出たことから判断すると、こうした用法は英語一般に確認可能な現象と言えるかもしれない。尚、Schmid (2000) では、後接する補文が補文化辞 *that* を伴う場合と伴わない場合を明確に区分していない。本稿では、1) 補文化辞を伴う場合 (以下 *the SN is that*) と、2) 補文化辞を伴わない場合 (以下 *the SN is ∅*) に小分類した上で談話における使用頻度を提示する。数値は素頻度を表している。

表2は幾つかの興味深い特徴を示している。まず、全体の頻度を見ると *problem* を含む SN 構文が最も多く使用されており分析対象とする理由付けともなる。しかし、*the SN is that* では最も使用頻度が高いが、*the SN is ∅* では3位に止まっている。つまり、用いられる貝殻名詞の種類に応じて、後接の好まれる統語形態も異なることが分かる。顕著な分布は *question* と *thing* が *the SN is ∅* として用いられる傾向であり、特に *question* の場合は直接疑問文を導く機能に特化している (柴崎 2014b)。一方、*result* と *difference*

は the SN is that として用いられる傾向が強い。

表2: COCA における the+shell noun+is that/∅ の使用頻度 (最終アクセス: 2014/03/04)

Ranking	Shell noun (SN)	The SN is that	The SN is ∅	Total
1	<i>problem</i>	1115	581	1696
2	<i>fact</i>	909	762	1671
3	<i>question</i>	12	1029	1041
4	<i>truth</i>	455	508	963
5	<i>point</i>	408	331	739
6	<i>reality</i>	407	133	540
7	<i>thing</i>	74	386	460
8	<i>result</i>	362	12	374
9	<i>difference</i>	247	64	311
10	<i>trouble</i>	115	185	300

表3: COCA における *the problem is that/∅* のジャンル別分布 (最終アクセス: 2014/03/04)

	Spoken	Fiction	Magazine	Newspaper	Academic	Total
<i>The problem is that</i>	439 (39.4%)	53 (4.6%)	291 (26.1%)	140 (12.6%)	192 (17.2%)	1115 (≐ 99.9%)
<i>The problem is ∅</i>	358 (61.6%)	38 (6.5%)	112 (19.3%)	56 (9.6%)	17 (2.9%)	581 (≐ 99.9%)
Total	797 (46.9%)	91 (5.4%)	403 (23.8%)	196 (11.6%)	209 (12.3%)	1696 (≐ 100%)

更に、COCA で分類可能なジャンル毎の分布は表3の通りである。括弧内のパーセンテージはジャンル毎の相対頻度を表している。全体で約半数が spoken ジャンルで使用され、特に the SN is ∅ での使用頻度が高い。こうした事実は、*the problem is* が口語でよく用いられているという LDOCE (2012) の説明を裏付けている。

2.3. *The problem is (that)* の統語的振舞い—SBCSAE の場合

LDOCE (2012) の説明にあるように、*the problem is* を含む当該構文は口語で多く確認できるとの予測がつく。Biber et al. (1999: 448) は *the thing* と *be* 動詞の組み合わせでの使用頻度を紹介し、会話ジャンルの場合、100万語当たり20回以上の頻度で確認できると報告している。更に、*but the thing is, the only thing is* のような表現を「語彙的塊/束」(‘lexical bundles’の試訳)と呼び、それらを「節の断片」(‘clause fragments’の試訳)とみなしている (ibid.: 1005)。こうした一連の調査結果から、*the thing is* と類似した表現を考察する場合、会話ジャンルでの振舞い方の分析が必要であると結論付けている。

本稿ではアメリカ英語における *the problem is* の変化を考察するため、SBCSAE を検索してみると以下の結果となった。(the) *thing is (that)* が24例、(the) *point is (that)* が4例、(the) *problem/fact/question is (that)* がそれぞれ2例、(the) *reality/matter/reason is (that)* がそれぞれ1例確認できた。尚、主要部名詞に *the* 以外の修飾要素が確認される場合 (i.e., *the whole point is, my point is, thing is*) も含めてある。

Schmid (1999: 129) は、貝殻名詞部分と後接の内容部分 (shell content) は別のイントネーション・ユニット (Intonation Unit, 以下 IU) として現れるのではないかと予想してはいるものの分析はしていない。SBCSAE では *the problem is* の生起率は決して高くないが、IU に基づいて実際の会話を書き起こされているため、オーバーラップやポーズ等、極度に雑多にならない程度に必要な情報も加筆されている。Chafe (1987: 22) は「IU とは、単独の首尾一貫した音調曲線の下に生起する纏まりを持った一連の語群であり、休止が先行するのが通常である」(“An intonation unit is a sequence of words combined under a single, coherent intonation contour, usually preceded by a pause”) と定義している。

以下に、(the) *problem is (that)* の例を SBCSAE から引用し、IU に基づく会話の書き起こしの実践例を提示する。該当箇所には下線が施してあり、丸括弧内の数字は SBCSAE のファイル番号を示している。¹

- (5) ALAN: The problem is,
 ... % = with me,
 ... not that it comes up too much, (SBCSAE 060)

¹ SBCSAE の例文に用いられている記号は以下の慣例に基づいている。‘...’ = medium pause (between 0.3 and 0.6 seconds); ‘..’ = short pause (about 0.2 seconds or less); ‘-’ = truncated word; (H) = inhalation; % = glottal stop; ‘=’ means lengthening. 更なる詳細は Du Bois et al. (1993) を参照のこと。

- (6) ALAN: (H) my problem is,
... and it's a lot easier to do it that way, (SBCSAE 060)

用例数は少ないものの2例ともにIUとして独立している点は注目に値する。²つまり、(5)のように後節に補文化辞 *that* がある場合にも、IUのレベルで考察すると統語的な独立度が確認され、Biber et al. (1999) の提唱する「節の断片」(‘clausal fragments’) と符合する。³

3. *The problem is (that)* の談話機能

3.1. 話題導入機能

後方照応機能を担う *the problem is (that)* には、(7) の例にあるように(問題としての)話者の見解を提示する事例がある。以下、COCAの例文への最終アクセスは2014年11月24日である。

- (7) LIMBAUGH: Oh, man, too much com – don't find jobs. I'm going to — I — I hope this doesn't hurt your feelings. I've — it probably will. I'll bet the pr — the problem here is not that you can't find a job. The problem is there are jobs you won't take. That's the problem.

(1995 COCA: SPOK, *Ind Limbaugh*)

(7) では、聞き手に対する配慮から *I hope this doesn't hurt your feelings* を前置し、更に指示代名詞 *this* の後方照応機能を活かし、直後に提示される話者の見解の布石としている。しかし、2つ目の下線部分の直後にある *there are jobs you won't take* が新情報として提示され、問題内容を再確認する *that's the problem* をもって当該談話に区切りがついている。換言すると、当該談話内容の前後に、話題導入機能を果たす *the problem is (that)* と話題集約機能を果たす *that's the problem* がそれぞれ使用され、shell content に対して対照的な分布が確認できることになる。(8) に図示する。

- (8) [the SN_i is (that) shell content that's the SN_i] discourse

² 参考までに、SBCSAEにおける *the point is (that)* は4例中3例が後節と別のIUに生起しており、*the thing is (that)* は、24例中21例が *the thing is that* のチャンクとして独立したIUに生起している(第4.1節も参照)。つまり、shell contentの部分とは切り離された統語的振舞いが非常に強いことが分かる。

³ データの中には *the problem is, that ...* も確認可能である。しかし、用例数としてCOCAで25例(0.05 per mil.)、COHAで1999年に1例(0.04 per mil.)のみと少ないため本稿では取り上げない(共に2013年11月29日にアクセス)。

談話上のこうした分布は必ずしも貝殻名詞の語義によるものではない。つまり、前後で使用される貝殻名詞が異なる場合も可能である。例えば以下の例がある。

- (9) ROBERTS: ... if Newt Gingrich were to not be a factor he would get the majority of Newt Gingrich's supporters and be able to roll all over Mitt Romney in a lot of these contests that are remaining. The problem is, can he get to 1144 delegates? That's the open question, Bret.

(2012 COCA: SPOK, Fox Baier)

- (10) Velez-MITCHELL: You know, the thing is, nobody's ever going to feel sorry for Jennifer Aniston. That's the problem with the whole premise.

(2009 COCA: SPOK, CNN Showbiz)

(9) では、どれだけの支持を得ることができるかが話題となっている。話者が問題とする内容が *the problem is* の直後に *can he get to 1144 delegates?* として提示されているが、この見解(話題)を *that's the open question* と換言してまとめている。つまり、話題導入時には、後接の内容 (shell content) を「問題」(*problem*) として対話者に理解して欲しいという意図で、話者は「問題」(*problem*) というラベル ('label' in Francis 1994) を使用している。しかし、対話者との相互作用を経て(そして恐らく談話全体の流れを考慮に入れ)「未決/保留問題」(*open question*) とラベルを改めている。ここで言う「ラベル」とは、関連する談話部分を要約する ('encapsulate') 機能を担うという意味である (Francis 1994: 85)。(10) では、「要は、問題は」(*the thing is*) とラベル付けされたものが *that's the problem* でまとめ直されている。改めて図示すると以下ようになる。

- (11) [the SN_i is (that) shell content that's the SN_{ij}] discourse

Ivanič (1991) の論文の表題にもあるように、発話時に最適と思われる貝殻名詞は、話者が「コンテキストを探し求めて」(in search of a context) 主体的に選ぶものである。Schmid (2000) では、*problem*、*thing*、*question* は細かく見ると異なる分類になっている。しかし、当該談話の前後に生起する the SN is (that) 構文と that's the SN 構文の中に、話者の主体性に従って貝殻名詞は(比較的)互換的に使用されており、正に談話基盤型の構文と言える。

3.2. 話題展開機能

一方、(11) で提示したように、当該談話が次の談話に連鎖する場合もある。例えば(12) がその一例である。

- (12) CROWLEY: But you said there wasn't a terror threat, right?

KERRY: Oh, there is now. That's the problem. The problem is that where there wasn't a connection to al Qaeda, ... (2004 COCA: SPOK, CNN Zahn)

イラクにアメリカ軍を駐屯させることについて、Crowley氏はテロの脅威が無いとの理解だったので Kerry 上院議員に説明を求めている。しかし、このインタビュー時にはテロの脅威があるとされていたため、ケリー上院議員は「そこが問題だ」(*that's the problem*)と返答している。そして、その話題を展開させるべく *the problem is that* を用い、アル・カーイダとの繋がりが見えない点が問題だと加えている。第3.1節の例文と異なる部分は、(12)の *the problem is that* が後方照応機能を果たして *where there wasn't a connection to al Qaeda* を指しているだけではなく、*that's the problem* で集約された内容をも前方照応的に部分的に指している点である。

一方、当該談話を *that's not the problem* で一度まとめ、その直後に真の問題点を *the problem is (that)* によって提示する事例もある。(13)がその一例である。

(13) “Our guys wear Nike and Pony shoes and Air-Max helmets, just like Notre Dame or Michigan. That's not the problem. The problem is, we don't have any Tyrone Wheatleys.” (1994 COCA: NEWS, New York Times)

話者 (Douglas Fowlkes コーチ) によれば、彼のアメリカン・フットボール・チームはノートルダムやミシガンのチームの様な着こなしをしているが、そのこと自体が問題ではなく、真の問題は Tyrone Wheatley のような優れたランニングバックがいない点である、という談話の流れである。(12)同様、ミクロ・レベルでは異なる話題であるが、マクロ・レベルでは関連する二つの話題が連鎖しており、*the problem is* は前方・後方照応の二つの機能を担っている。

二つの談話を繋ぐ構文連鎖の場合にも、前後で異なる貝殻名詞を使用する事例が確認できる。(14)に例示する。

(14) BUCHANAN: You're talking about a cadre of trained scientists, basically ... (一部省略) ... They can't really meet in the Middle East, not easily, anyway, so they're often — their meetings are often outside, sometimes in Turkey or in the United States. That, you know, in terms of their own relations, that's not a problem. The question is, how do you convey this message of, you know, the importance — and it is a regional question ... (2003 COCA: SPOK, CNN Insight)

アメリカ軍の幹部団が中東へ赴かず、トルコや合衆国内に止まって会議に応じる点が話題になっている。幹部の能力や職務上そのこと自体は問題ではない (*that's not a problem*)

が、その点に関する問題・疑問 (*question*) は、重要なメッセージをどう伝えるのかということで、更に、一連のマクロ・レベルの談話を *it is a regional question* でまとめている。談話の流れを図示すると (15) になる。⁴

- (15) [... shell content that's (not) the SN_i] micro-discourse 1 } macro-
 [the SN_{ij} is (that) ... shell content that's the SN_{ij}] micro-discourse 2 } discourse

本節を終える前に、*that's (not) the problem* と *the problem is (that)* の連鎖の重要性を別の視点から考えてみる。一例を (16) に示す。

- (16) MARK-COOPER-1CONS#: Well, but - of course that's the problem is that
 they've underinvested in capacity. (2009 COCA: SPOK, ABC 20/20)

一見して分かるのは、*the problem* を軸として *that's the problem* と *the problem is that* が融合している点である。このように、ある語あるいは句を共有した二つの節から成る構文は「共有構文」(‘*apo koinou*’) (*OED*, s.v. *apo koinou*) と呼ばれ研究も進んでいる (e.g. Lambrecht 1988; Hopper 2007)。注目したいのは、前方照応形の *that's the problem* と後方照応形の *the problem is that* が情報連鎖に沿った形で融合しており、逆の連鎖は確認できない点である。恐らく、コーパスで確認できる以上に (12) のような構文連鎖が起こり、(16) のような共有構文が創発されたのではないかと推察できる。詳しくは柴崎 (近刊 a) を参照されたい。

3.3. 発話開始位置と構文連鎖

Günthner (2011: 18-19) は、ドイツ語の *die Sache ist/das Ding ist* (“the thing is”) 構文が「投射句」(‘*projector phrase*’) 機能を果たして後続する情報を予測する点、重要事項を何らかの理由で遅らせる点などを指摘している。(17) はその一例である。尚、本稿では、Günthner (2011) で使用されている転写方法を分析上支障の無い範囲で略記してある。英語訳も Günthner (2011) に従っている。[] = overlap; -: level pitch.

- (17) Elke: und dann auch vie- vielleicht,
 lieber das Thema.
 Birte: Das Ding ist aber auch-

⁴ Schmid (2000: 193) でも *that's a(n)/the SN* の事例が紹介されているが *problem* の事例は挙げられていない。尚、ドイツ語でも *das ist das Problem* ‘that is the problem’ と *das ist ein Problem* ‘that is a problem’ という構文上のヴァリエーションが確認できる点を付記しておく (Otsuka 2014 を参照)。

dass Ich in der Germanistik promovieren will.

Elke: [mhm]

Birte: [und] deshalb ein Germanistisches Thema brauch.

(Elke: and then also per- perhaps, this topic would be better. Birte: but the thing is also- that I want to get my Ph.D. in German. Elke: [mhm] Birte: [and] that's why I need a topic within Germanistics.) (Günthner 2011: 15)

(17) は大学講師の Elke と大学院生 Birte との会話からの抜粋である。博士論文の準備をする Birte に対して、Elke は最初の発話部分で修士論文と同じテーマを掘り下げるのが良いと提案している。それに対して Birte は *das Ding ist aber auch* (“but the thng is also-”) を用い、修士論文のテーマであった一般言語学ではなく、ドイツ語学（あるいはゲルマン学）で博士号を取得したいとの本音を打ち明けている。指導教員である Elke に対する躊躇が読み取れるだけではなく、*aber auch* (“but also”) との共起により、異なる見解が提示されるとの予測も可能である（第 1 節参照）。

ここで注目したいのは、*das Ding ist (dass)* が後続の情報を予測する機能だけではなく、発話の開始部分で用いられている点である。Günthner (2011) で紹介されている全ての例文で *das Ding ist (dass)* が発話開始位置に生起していることから、*das Ding ist (dass)* は後続の情報提示だけではなく、前述の情報に対する対比機能も果たしているのではないかと推測できる。(5) の *the problem is* や (10) の *the thing is* も同様の機能を果たしていると思われる。

一方で、第 3.2 節では、*that's (not) the problem* と *the problem is (that)* が連鎖する事例も考察した。では、同様の構文連鎖は発話開始位置、つまり対話者の順番交替 (turn-taking) の位置で確認できるだろうか。(18) は (12) の再提示である。

(18) CROWLEY: But you said there wasn't a terror threat, right?

KERRY: Oh, there is now. That's the problem. The problem is that where there wasn't a connection to al Qaeda, ... (2004 COCA: SPOK, *CNN Zahn*)

(19) KROFT: (Voiceover) How long can the new government afford to pay millions of disgruntled defense workers to do nothing? Shlykov thinks maybe a year, but that's not the problem.

Mr-SHLYKOV: The problem is that the people won't be staying idle for a whole year. (1992 COCA: SPOK, *CBS Sixty*)

近い例として (18) が挙げられるが、今回考察したデータ中には発話開始位置での構文連鎖は確認できなかった。一方、話者が *that's not the problem* で発話を終え、対話者が *the problem is that* で発話を開始する事例は (19) で確認できる。

ところが、ドイツ語では発話開始位置での構文連鎖が確認できる。

- (20) Reich-Ranicki, M.: Das ist doch nicht das Problem. Das Problem ist, die jungen Autoren debütieren mit einem guten Buch, und nach dem ersten Buch kommt nur noch Mist. (1989 DWDS, *Das Literarische Quartett*; Otsuka 2014)
(Reich-Ranicki, M.: That is not the problem. The problem is, the young authors debut with a good book, and/but after the first book comes only rubbish.)

紙幅制限のためこれ以上の例文を提示できないが、Günthner (2011) の指摘の通り、対話を通して言語が変化してゆくことは間違いないと思われる。また、Schmid (2000) が SN 構文を前方照応型と後方照応型に分類した点 (表 1) も、第 3.1 節で分析した事例から説得力があると判断できる。一方で、第 3.2 節で注目した構文連鎖、構文の融合、そして、様々な構文連鎖の在り方を可能とする発話開始位置に注目すると、更なる談話機能が確認できる可能性も否定できない。貝殻名詞の内容を表す shell content は特定の発話状況下に関連する一時的なものである (Schmid 1999: 113)。その意味で、話者は the SN is (that) と that's the SN という話題の前後に固定して配置される構文を使用し、刻々と変化する談話に応じて適切な貝殻名詞を選び、談話の流れを主体的に作り上げている。結果的に確認されうる (15) および (11) のような構造は、正に構文の談話基盤性を裏付けている。

4. 談話機能に伴う文法化

前節までに、SN 構文が談話基盤型であり、対話者との相互作用および発話開始位置が重要な役割を果たしていることを確認した。一方、貝殻名詞のどのラベルを選んで貼るのかは話者であり、場合によっては話者のスタンスが貝殻名詞のラベル付けに反映される可能性も考えられる。そこで、*problem* の直前に用いられる修飾語を表 4 にまとめ、*the problem is that* に関係する文法化の事例を考察する。尚、数値は素頻度を表している。

表4: COCA における *problem* の直前の修飾語上位 12 タイプ (最終アクセス: 2014/03/12)

Ranking	Pre-modifier	___ problem is that	___ problem is \emptyset	Total
1	the	1115	581	1696
2	\emptyset	0	55	55
3	another	47	0	47
4	one	44	2	46
5	my	18	13	31
6	our	11	4	15
7	his	10	1	11
8	your	8	2	10
8	only	3	7	10
10	their	4	1	5
11	her	3	1	4
12	whole	3	0	3

4.1. 形態統語的縮約— \emptyset *problem is* \emptyset

表4は興味深い分析結果を提示している。例えば、修飾語を伴わない \emptyset *problem is* 表現が第2位の頻度を示し、且つ、補文化辞を伴わない非制限的な用法に限定使用されている。統語的制約が相対的に緩いこの用法の場合、繰り返し使用されることにより形態統語的な縮約の度合いが進行しやすくなり、一つのチャンクとして固定化されているとも解釈できる。Bybee (2010: 7, 34) によれば、チャンク化 ('chunking') とは共に用いられる一連の構成単位がより複雑な構成単位を作り出すプロセスであり、構文 ('constructions') や定型表現 ('formulaic expressions') の形成に不可欠であると説明されている。以下に一例を示す。

- (21) AVUTO, HOST: Well, the president is getting restless. He wants a stimulus package now. Problem is, the one in the Senate isn't the one he wants.

(2001 COCA: SPOK, *Fox Cavuto*)

(21) では定冠詞と補文化辞の省略された \emptyset *problem is* \emptyset が確認でき、上述の Bybee (2010) の指摘通り定型表現化された事例と見做せる。こうした形態統語的縮約の事例は、 \emptyset *point is* \emptyset (Shibasaki 2014a)、 \emptyset *thing is* \emptyset (Shibasaki 2014c)、 \emptyset *fact is* \emptyset (柴

崎 近刊 b) にも確認でき、反復使用に伴う文法化の縮小事例と判断できる。

4.2. 話者のスタンスと下位構文の派生—*my problem is (that)*

表4には、人称代名詞の所有格形が全て確認でき、中でも一人称単数形 *my* の使用頻度が高い。つまり、後続する shell content が話者の見解であるだけでなく、話者自身にとっての問題であることを、*my* は先行する貝殻名詞とともに明示している (Chafe 1994: 221 も参照)。主観化を統語面から裏付ける事例研究は余りないが (cf. Company 2006)、*the problem is (that)* 構文の場合には、後続の shell content に対する話者のスタンスが統語的に顕在化し、更には他の人称形をも派生させている (表5を参照)。COHA = *The Corpus of Historical American English 1810-2009*。

表5: COHA における「人称代名詞+problem is (that)」形 (最終アクセス: 2014/11/21)⁵

	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s	Total
<i>my</i> problem is (that)			(1)						1		2	4	2	4	14
<i>our</i> problem is (that)						(1)					4	2	2	3	12
<i>your</i> problem is (that)									(1)		3	1	5	3	13
<i>his</i> problem is (that)										1	1	3	2	1	8
<i>her</i> problem is (that)															0
<i>their</i> problem is (that)										1					1

⁵ 表5に提示した「人称代名詞+problem is (that)」は全ての例であり、部分的に抽出したのではない。尚、CLMETEV, OED および *The Helsinki Corpus of English Texts* (Early Modern English part 1500-1710) を用いたが、より古い事例を確認できなかった点を付記しておく。

表5は「人称代名詞+*problem is (that)*」形の史的発達をまとめたものである。数値は素頻度を表し、括弧表示のものは、当該事例の補文 (i.e. shell content) 部分が定形節ではなく TO 不定詞の場合を示している。本稿の中心的考察対象である *the problem is (that)* 構文とは異なるが、本節では貝殻名詞を修飾する人称代名詞に焦点を置いたため表5に含めた。尚、表1の分類では、N-*be-that* と N-*be-to* の両方が N-*be-cl* の下位構文とみなされている点も確認されたい。

表5で注目したいのは、人称代名詞による貝殻名詞の修飾が1人称形に始まり、2人称形の派生を経て3人称形へと拡大しており、正に人称階層に沿うように人称代名詞の修飾用法が発達している点である (Shibasaki 2014a: 104-105 も参照)。注意したいのは、2・3人称の修飾語が使用される場合である。以下に例示する。

(22) BARONE: Yeah. His problem is that, really, he — I think it's literally impossible for him to reconcile these statement that he made under oath in the January 17th deposition in the Paula Jones case, ...

(1998 COCA: SPOK, Fox Hume)

(23) “His problem is that if I say,” Bradley, put your shoes in the closet and then go brush your teeth, ...

(1999 COCA: MAG, Today's Parent)

(22) では *his problem* と発話されているが、直後の *I think* に示されるように「話者が考える彼の問題」という話者自身のスタンスが見て取れる。(23) も同様で、「言うのもなんだけど」(*if I say*) という発言に示されるように、「話者が考える彼の問題」であることが分かる。以下の事例も考えてみる。

(24) Mr-MULLENIX: Right there. Green sweater with this purse. The problem is, is that, you know, you're only in two or three frames usually.

(2009 COCA: SPOK, CBS 48 hours)

(24) では、*the problem is, is, that* が用いられているが、shell content を提示する前に *you know* を用いて、話者自身の見解を対話者へ提起している。形式上は *my problem is* ではないが、対人関係機能を有する *you know* を用いた話者のスタンス提起である。⁶

文化化研究では、元々の表現が (例えば形態統語的に) 縮小する一方で、作用域が拡大する点も指摘されている (e.g. Traugott and Trousdale 2014: 96-112; 小野寺 2014)。後者の場合、主観化あるいは話者のスタンスや発話態度の増加 (小野寺 2014: 14) などが関

⁶ 尚、(24) に見られるコンピュータの二重使用に関する事例研究として柴崎 (近刊 b) があり、研究の概観と検討事項も紹介されている。

係していると思われるが、*my problem is (that)* のように文法的に確認可能な形で話者のスタンスが創発する事例は取り立てて報告されていないようである（ただし Imo 2010 を参照されたい）。その意味で、*the problem is (that)* を含む SN 構文は更なる考察に値する言語現象と判断できる。

5. 総括

SN 構文は談話構造に直結した構文である。SN 構文としての *the problem is (that)* の場合、後行する内容節 (shell content) との位置は (調査した限りでは) 固定している。仮に、内容節よりも後に SN 構文を使用する場合には、前方照応機能を有する *that's the problem* を用いることになる。つまり、*the SN is that/∅* 構文は、談話機能上「話題導入」に特化した構文であり、一方、*that's the SN* 構文は「話題集約」に特化し、それぞれ中心となる談話部分の前後に対称的に生起している (第 3.1 節)。一方、*that's the problem* と *the problem is (that)* が連続して使用される事例も考察し、両構文の連鎖から *that's the problem is (that) ...* という共有構文 (apo koinou) が創発している点も確認した (第 3.2 節)。また、対話の視点から構文使用を考察すると、発話開始位置が重要な役割を担っていることも提示した (第 3.3 節)。この事実は、単純に一つの話題 (あるいは命題) の前後のみを機械的に考察するだけでは談話分析として不十分であるという、分析手続き上の問題を示唆している。

文法化の事例も考察した。一つは形態統語的縮約の事例 (*∅ problem is ∅*) であり、もう一つは話者のスタンスが統語的に顕在化する事例 (*my problem is (that)*) である。後者は、文法化する表現が新しい意味を発展させると同時に、話者のスタンスが統語面に反映される事例である。

直近のアメリカ英語史における *the problem is (that)* の分析により、構文と談話構造の密接な関係を提示することができた。今後の課題としては、構文と談話構造の相互関係を更に検証するための通時的調査が挙げられる。構文自体の談話基盤性が時間とともに強度を増しているか否かも重要なテーマとみなせるからである。稿を改めて論じたい。

参考文献

- Aijmer, K. 2007. "The Interface between Discourse and Grammar." In C. Celle and R. Huart (eds.), *Connectives as Landmarks*, 31-46. Amsterdam: John Benjamins.
- Aktas, R. N. and V. Cortes. 2008. "Shell Nouns as Cohesive Devices in Published and ESL Student Writing." *Journal of English for Academic Purposes* 7, 3-14.
- Biber, D., S. Johansson, G. Leech, S. Conrad and E. Finegan, (eds.) 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.

- Bybee, J. L. 2010. *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chafe, W. L. 1987. "Cognitive Constraints on Information Flow." In R. Tomlin (ed.), *Coherence and Grounding in Discourse*, 21-51. Amsterdam: John Benjamins.
- Chafe, W. L. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Company, C. C. 2006. "Zero in Syntax, Ten in Pragmatics." In A. Athanasiadou, C. Canakis and B. Cornille (eds.), *Subjectification*, 375-397. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Du Bois, J. W., Schuetze-Coburn, S., Cumming, S. and D. Paolino. 1993. "Outline of Discourse Transcription." In J. A. Edwards and M. D. Lampert (eds.), *Talking Data*, 45-89. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Flowerdew, J. and R. W. Forest. 2014. *Signalling Nouns in Academic English: A Corpus-Based Discourse Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Francis, G. 1994. "Labelling Discourse: An Aspect of Nominal-Group Lexical Cohesion." In M. Coulthard (ed.), *Advances in Writing Text Analysis*, 83-101. London: Routledge.
- Gray, B. 2010. "On the Use of Demonstrative Pronouns and Determiners as Cohesive Devices." *Journal of English for Academic Purposes* 9, 167-183.
- Günthner, S. 2011. "N be that-Constructions in Everyday German Conversation." In R. Laury and R. Suzuki (eds.), *Subordination in Conversation: A Cross-Linguistic Perspective*, 11-36. Amsterdam: John Benjamins.
- Halliday, M. A. K. and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.
- Hinkel, E. 2001. "Matters of Cohesion in L2 Academic Texts." *Applied Language Learning* 12:2, 111-132.
- Hopper, P. J. 2007. "Linguistics and Micro-Rhetoric: A Twenty-First Century Encounter." *Journal of English Linguistics* 35, 236-252.
- Hopper, P. J. and S. A. Thompson. 2008. "Projectability and Clause Combining in Interaction." In Ritva Laury (ed.), *Cross-Linguistic Studies of Clause Combining: The Multifunctionality of Conjunctions*, 99-123. Amsterdam: John Benjamins.
- Imo, W. 2010. "*Mein Problem ist/Mein Thema ist* ('My Problem is/My Topic is'): How Syntactic Patterns and Genres Interact. In H. Dorgeloh and A. Wanner (eds.), *Syntactic Variation and Genre*, 141-166. Berlin: De Gruyter Mouton.
- 井上永幸・赤野一郎. (編) 2003. 『ウイズダム英和辞典』、第5版、東京：三省堂.
- Ivanič, R. 1991. "Nouns in Search of a Context." *International Review of Applied Linguistics* 29:2, 93-114.
- Keizer, E. 2014. "The "(DET) *Fact is (that)*" Construction in English and Dutch." Paper given at the 3rd Conference of the International Society for the Linguistics of English (ISLE-3), Zurich, Switzerland, Aug. 24-27, 2014.
- Lambrecht, K. 1988. "There was a Farmer Had a Dog." *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 319-339.
- Lin, M.-C. 2012. "Shell Nouns on the Move: Expert and L2 Abstracts in Applied Linguistics"

- tics.” *Arab World English Journal* 3:3, 223–245.
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 2012. fifth ed. London: Longman.
- 大室剛志. 2005. 「英語学と英語教育の乖離を埋める一つの可能性」、『英語青年』、151: 3 (6月号)、4–6.
- 小野寺典子. 2014. 「談話標識の文法化をめぐる議論と「周辺部」という考え方」、金水敏・高田博之・椎名美智(編)『歴史語用論の世界』、3–27. 東京: ひつじ書房.
- Otsuka, H. 2014. “Discourse Functions of Shell Noun Constructions in German.” Paper given at the 32nd Conference of the English Linguistic Society of Japan, Gakushuin University, Tokyo, Nov. 8–9, 2014.
- Schmid, H.-J. 1999. “Cognitive Effects of Shell Nouns.” In K. van Hoek, A. Kibrik and L. Noordman (eds.) *Discourse Studies in Cognitive Linguistics*, 111–132. Amsterdam: John Benjamins.
- Schmid, H.-J. 2000. *English Abstract Nouns as Conceptual Shells: From Corpus to Cognition*. Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- 瀬戸賢一・投野由起夫. (編) 2012. 『プログレッシブ英和中辞典』、第5版、東京: 小学館.
- Shibasaki, R. 2014a. “On the Development of *the Point is* and Related Issues in the History of American English.” *English Linguistics* 31:1, 79–113.
- 柴崎礼士郎. 2014b. 「挿入節の分布から見る談話の周辺と情報連鎖について——*the question is (that)* と *that's the question* を事例として——」日本認知言語学会第15回全国大会(慶應義塾大学日吉キャンパス, 2014年9月21–22日)での口頭発表.
- Shibasaki, R. 2014c. “On the Grammaticalization of *the Thing is* and Related Issues in the History of American English.” In M. Adams, R. D. Fulk and L. J. Brinton (eds.), *Studies in the History of the English Language*, 99–121. Berlin: De Gruyter Mouton.
- 柴崎礼士郎. 近刊a. 「共有構文 (*ἀπὸ κοινῶν*) の創発と談話構造——現代アメリカ英語を中心に——」『ことばと人間』第10号、17–37. 「言語と人間」研究会.
- 柴崎礼士郎. 近刊b. 「現代アメリカ英語の二重コピュラ構文」、秋元実治・青木博史・前田満(編)『日英語の文法化と構文化』東京: ひつじ書房.
- 鈴木寛次・三木千絵. 2011. 『英語は将来こう変わる』東京: 大修館書店.
- Traugott, E. C. and G. Trousdale. 2014. *Constructionalization and Constructional Change*. Oxford: Oxford University Press.
- 塚本倫久. 2012. 『プログレッシブ英語コロケーション辞典』東京: 小学館.

コーパス

- A Corpus of Late Modern English Texts (Extended Version) 1710–1920 (CLMETEV)*, University of Leuven, Belgium (Hendrik De Smet).
- The Corpus of Contemporary American English 1990–2012 (COCA)*, Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies).
- The Corpus of Historical American English 1810–2009 (COHA)*, Brigham Young University, U.S.A. (Mark Davies).
- The Helsinki Corpus of English Texts (HC)*, Early Modern English part 1500–1710, ICAME

Collection of English Language Corpora, University of Bergen, Norway.

The Oxford English Dictionary (OED) 2009. 2nd ed. on CD-ROM Version 4.0, Oxford University Press, Oxford.

The Santa Barbara Corpus of Spoken American English (SBCSAE), Department of Linguistics, University of California, Santa Barbara (UCSB).